

# 高校が急速に変わっている



編集部

一九九一年（平成三）の三月、第一四期中央教育審議会の『新しい時代に対応する教育の諸制度の改革について―（高校教育の改革とこれに関する大学・短大・専修学校の教育の課題、その後の生涯学習社会への対応等を提言）』が答申されてから全国の高校教育は制度の面でそれまでの各地域での先導的試行の段階をこえて劇的な「多様化」の道をあゆみはじめました。

県教育委員会もこれを受けて「新しい本県高等学校教育の在り方について」を新潟県高等学校検討委員会に諮問し、同委員会は翌年（平成四）諮問に承えて①普通科の比率をたかめる ②特色ある学科を新增設する ③職業学科を改革する ④単位制高校を設置する

等々を答申しました。教育委員会は高校教育改革推進班を委員会内にもうけて次々と文部省の通知にそった「多様化」の諸策を実施に移してきています。

特集では新潟県で高校教育の「多様化」が現にどのようなに進行しているのかを整理してみます。そしてその渦中にある先生方がそれをどう受け止めておられるのかを語っていただきました。

まとめとしてこの「多様化」政策がどのような背景から提起されているのかを紹介いたします。新潟県の高校教育へのさまざまなみなさんご意見がこれを契機に寄せられることをねがっております。（編集部）

二月二十四日、平成十一年度の公立高校の一般選抜志願状況が確定しました。平均倍率は一・〇六倍です。九六パーセントをこえる高校進学率、西暦二〇〇〇年から急減する中学卒業生をすなわち「少子化」の傾向という二つの条件だけとれば新潟県の高校は県下の中学卒業生を全員受け入れる器を用意できることになりました。

「十五の春」を泣かせる高校受験勉強がなくなり、いくつかの中学校ごとの高校をつくりだせば、津南町や津川町でいま実験中の「中高一貫教育」が全县で実現するのですが、事態はこれとまったく逆な方向の「多様」な高校選びの道がつくられてきています。

新潟日報二月二十五日付けの『県内公立高の志願倍率確定』という全県の公立高校志願状況一覧表をみますと一九六〇〜七〇年代の高度経済成長期、高校時代をすごした親たちの頃の普通高校と職業高校等の校種や学科が大きく様変わりしているのがわかります。どのような方向にどう変わったのでしょうか。

### 急速にすすむ大学受験体制

まず県下の多くの高校で大学等への受験勉強の体制

づくりが急速にすすんできているのがこの間の「高校改革」の特徴のひとつです。  
(横山報告参照)

九二年(平成四)南魚沼郡浦佐大和町に文部省の「あたらしいタイプの高校の奨励」策にそってできた「国際情報高校」がその筆頭にあげられます。全県学区でよりすぐった生徒をあつめ県立の大学受験予備校ともいわれ、県教委の大学受験政策のモデル校ともなっています。ついでそれぞれの地域の大学受験に徹底的にシフトした進学校、新潟高・新発田高・長岡高・高田高に「理数科」が新設されました。理工大系・医大系をめざす偏差値の高い中学生を集めようとしているようです。今年の高校入試(一般選抜試験)で新潟高校理数科は最高の二・九〇倍の志願率となっています。

専門高校(呼称をかえた職業高校)でも大学受験のためと思われる学科の新設が進行しています。

これまでの商業教育との関連がない、その他の学科といわれる「国際教養科」が新潟商業高、三条商業高、柏崎商業高に新設されました。

専門高校からの一定の推薦枠をもうけて英検・全商英検・日商簿記・全商簿記・情報処理技術者検定(通産省)・全商情報処理試験などの資格・検定をいさせる

推薦入試制度を実施している大学への受験や、工業・商業、農業、水産、情報、衛生看護、等々の学科を学んできた高校卒業生の枠をあけて選抜試験を行う大学受験の道もあります。全国の専門高校からの大学合格者の大半がこの推薦入試をつかっています。(細川報告参照)

### 時代の進展を反映する「専門科目」の多様化

かつて商業高校は商業学科一つでした。この商業科も商業科のほかに会計科と情報経理科・情報処理科等々に細分化されています。これらの学科での技能検定合格や技能資格を取得することによって大学・専修学校への進学が可能になる学科であるとともに、OA機器でうごく事務処理の実態にそう新設の学科です。

工業高校もかつての機械・電気・建築・土木・工業化学科に加えて電子科ができ、自動制御でうごく機械を学ぶ電子機械科、機械システム科そしてデザイン科テクニスタイル(織物)デザイン工学科などが新設されています。(遠山報告参照)

農業高校にも新しい科ができています。かつての農業・農業土木・林業・農業経済科のほかに生産技術

(農業・園芸・畜産学科などの整理統合された科)、食品化学、食品流通、生産工学、園芸、造園、環境緑地科などです。「農村婦人の育成」をかかげた生活科や津川・水原高校などの普通高校に併設されていた農業科は農業経営が後継者難と先行き不安定な状況にあること等の理由でなくなりました。(飯田報告参照)

「特色ある学校・学科」の新設という「多様化」の波、普通高校で「特色ある新設学科」を設置したのは、中条高校の英語科と新潟中央高の音楽科、八海高校の体育科です。

あたらしい職業教育の分野では福祉科(八海高校)が高齢化社会を反映した学科として新設されています。これまでであった普通課程の高校、職業課程の高校の他に第三の学科といわれる総合学科の高校が九十五(平成七)年度から連続して新設されました。十日町総合高、新井高、栃尾高、糸魚川白嶺高です。

「職業選択を視野にいれつつ主体的、個性的に自己発達をとげることができるような学科環境をつくる」という点を評価する意見もありますが、普通科とも職業科ともつかぬ「お粥<sup>かゆ</sup>学科」という意見も出ています。

生徒の興味・関心や将来の進路選択にこたえる多様な科目選択を用意するには沢山の設備や教員の数がいります。このことが大きなネックになっています。

(山下報告参照)

働く青年のための定時制高校も様変わりしました。多くは定員割れを起こし、募集停止となり、ついに廃校となりました。学年進行で四年間通う定時制高校は全県で現在、九ヶ校に激減しています。「単位制高校」に変わったのは新潟市立明鏡高校、長岡明德高校、高田南城高校です。社会にでて再度学びたいときに学べる学校という「生涯教育」の一端を担うものとされています。(長井報告参照)

### 高校入学選抜制度の多様化

高校教育の「多様化」は上記のような学校・学科の「多様化」でとどまりませんでした。

高校にはいる入試方法が九十五年(平成七)から大きく変わりました。これまで職業科目をもつ専門高校だけにあった「推薦制」が普通高校に導入されました。推薦枠はその学校ごとで十五%、三〇%、五〇%の枠をえらびます。入試判定にさいしてそれまで同じ比重

で評価していた調査書と学力検査による学力判定の比重もその学校の判断にゆだねられました。

さらに英語や数学などの入試二科目の得点を二倍する傾斜配点も学校ごとにみとめました。二次募集も行われています。高校の数だけ生徒の受入れ方が異なる道がひらかれ、中学校側では進学指導がより複雑化して大変です。

### 学区の変更による高校選択「多様化」の道

現在進行中なのは通学区の変更です。県教委の諮問をうけて本年三月、公立高校通学区域検討委員会はこれまで全県十の通学区を村上学区と新発田学区を合わせて、柏崎学区と長岡学区を合わせるることによって八学区とし、全八学区の間では隣接学区間での若干数の通学をみとめる報告書を打ち出しました(本年三月二十三日)。

「通学区域についての不公平感」をなくし「学校選択幅の拡大」をはかるという趣旨の報告です。これも「多様な」高校の選択という方向を加速させる施策のひとつだといえます。

## 教育内容も「多様化」していく

一九九八年(平成十)七月、教育課程審議会から『幼稚園、小学校、中学校、高等学校、盲学校、聾学校、養護学校の教育課程の基準の改善について』が答申されました。この答申の高校教育に関する部分の「多様化した生徒の能力・適性・進路等に即し、基礎的・基本的な内容に重点をおいたり、生徒の学習意欲が高まるようなさまざまな選択科目を用意する…」という方針についてはいくつかの問題点が指摘されています。

教育内容が同じ数学、国語、英語等でも選択の仕方で内容の難易度に差が出てくるカリキュラムを組めるようになります。ですから進学校は大学受験科目の力を高めるカリキュラムをいまよりさらに加速させると予測されますし、逆に中位以下の普通高校や専門校では必修の科目でも二単位にすることができそうですので基礎学力の低下が心配されています。

また、同じ科目でも「学力」に差のある二単位か四単位のどちらにするかと選択をせまられます。同じクラスにおいても能力別編成授業が始まるのです。(詳細は佐々木論文を参照してください。)(文責・本田)

### 【次号(第五八号)予告】

#### 特集 「小学校一年生」

就学前の子ども…人と交わって人になる親と子のいま昔の一年生とどうちがうの…親と共同子育てに未来が地域生活のある小学校のよき…放課後の子どもたち親の不安…一年生でおちこぼれるってほんとした子どもたちはどこでつまづくのか…

親の質問に答えて(一年生の文字の習得)

(一年生の算数入門)

小学校一年生は生育過程の最初の転機…

アンケートの中に子どもたちの生活が見える…

単発論文 「日の丸・君が代」の強制と学校

少年法の改正

教師が輝くとさ

インドネシアの自然と子どもたち

学校へいかになくなった子どもたち

教育課題を論議できる校務分掌活動を

「総合学習」を考える

丸山初代

高橋武昌

立石由美

横山英子

高橋武昌

立石由美

編集部

成嶋 隆

近藤明彦

中野芳彦

野中昌法

熊谷直樹

(交渉中)

(交渉中)